

繪本西遊記

初編

八

八遠21
2500
40-8



一遠1特
號2500
卷40-8

世
本
貸
二

東京牛込細工町
誠光堂

池田屋清

凡上... 今... 男女... 池田屋... 磨石... 須彌靈吉定風魔

本面遊記初編卷之八

護法設莊留丈聖

須彌靈吉定風魔



孫行者... 虎... 黃風... 我師父... 其仇... 一... 積... 大... 行... 風...

黃風妖
術挫孫
行者



黃風王



悟空

黄国王とび行者が面に向て怪風を吹かればは風行者が眼
て更に目をひらく事あさり行者大きに驚き身を返して逃
ろと黄国王とまされと追を風を収めて洞の中へゆるり行者
八戒に逢て戦ひの始終をおごり妖精櫻我師父と殺すと
つらまじされば再び計を定めて救ひ出せんとせん我怪風に
吹れて眼珠痛を候流もく止度い邊に眼科先生といふ療治と
交て後我を渡すと八戒と共に馬をひき山の麓の人家にま
一宿をさひらりに裏より老翁一人と出兩人をいさまい入胡麻
飯をとめてまことほなるゆゑ行者老翁に問ふて曰く我今日
黄国川の妖怪と戦ひ目に吹れて眼の痛たぐははゆるに眼
糸を賣家やいとと尋るに老翁曰くは妖怪がまを黄風
神風と号して人の命を縮む神仙の方にあらざればは治さるこ
あつたに我家に花九子膏と云仙薬あり風眼を治さるの仙
方なりとて取申してあさられは行者大きによろこびると
眼に點下八戒と曰く其夜に眠るる夜明て行者目を
ももきかんまの眼をひらきらに常より益は起上りて四方を
見るにあり家名も老翁も僕もいさや成なりて只柳の本に
戒と曰くく卧居る八戒大きに愕る我何のわがる荒野を
麻るるぞやとてやめた家へ入り老翁へ何地へ行くといふた
と行者多きう你鼓子鼓とまがけて樹の上ふかけし怪子と
云八戒御く是と見れば四句の頌あり其詞に曰く

黄国王とび行者の面



卷之四十五

護法
與藥
療行
者眼



護法

悟空

八戒

卷之四十五

五

莊居非是俗人居

護法伽藍點化廬

妙藥與君醫眼病

盡心降怪莫躊躇

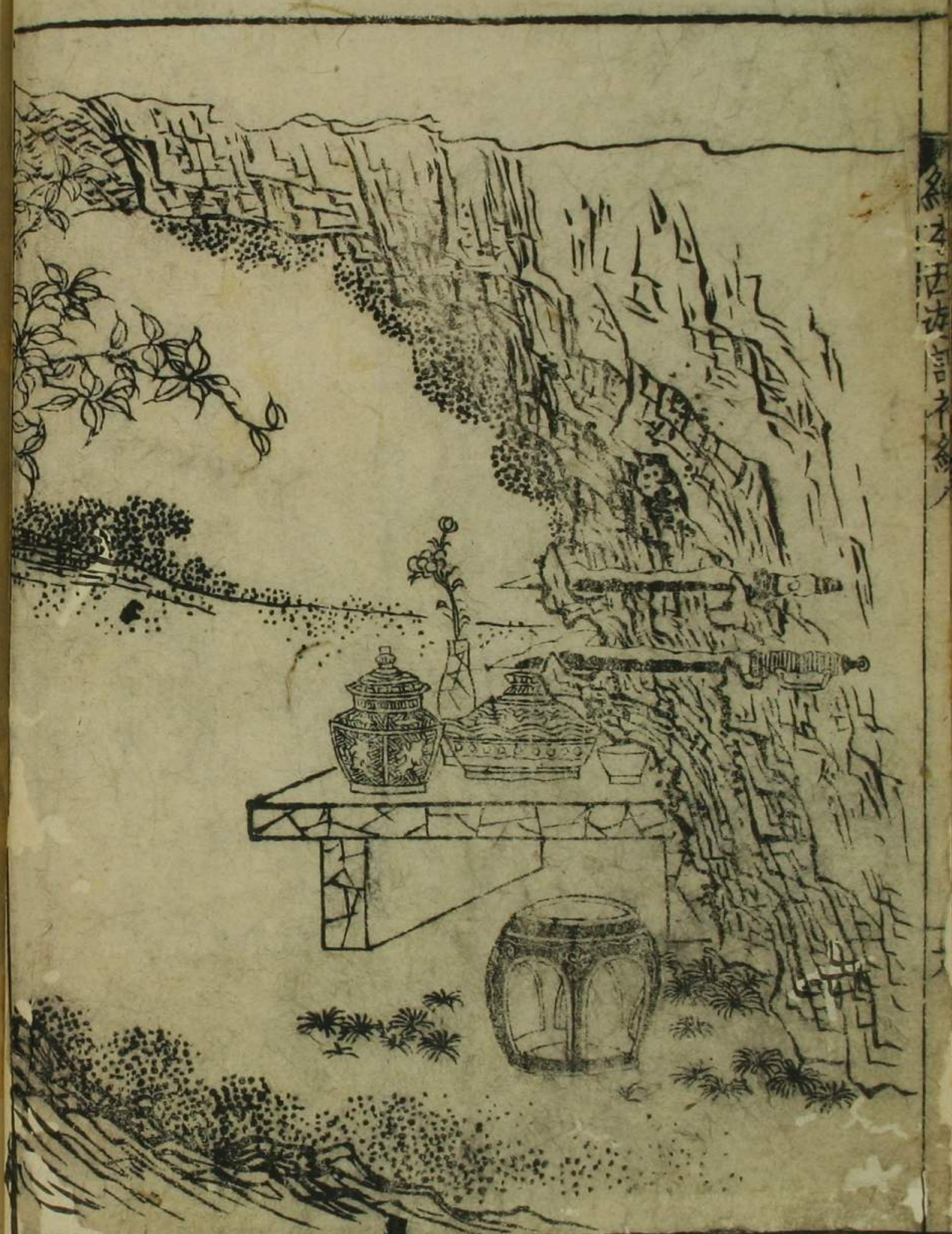
行者八戒以示之曰是伽藍觀音菩薩の命とて暗に師父
と我くと保あふものなり 你安に在る馬に行李と守るるを
我ハ師父の安否と氣がひまらんとして仰の前まへに飛行ひやうぎやう方かたを
て一個の故吏こじとて入り仰申まをさへ飛とり師父しふをたづぬるに椿つばきの本に
三藏さんざうをかゝり居ゐる行者ぎやうじや師父しふの頭あたまの上うへに止とりて師父しふと
嗚なるに三藏さんざう行者ぎやうじやが声こゑをききて懸かぐりたるん地ちして悟ご空くう你なんぢいつ
に在あると仰まをさふ行者ぎやうじや曰いく我われハ是こゝ則すなはち師父しふの頭あたまの上うへに止とり在ある

我われ今日こんにち中ちゆうに妖精じやうぎやうとて師父しふと救きうひまらんん安やすくおおし
りせとて又また飛行ひやうぎやうして黄風わうふう王わう居ゐる居間ゐまの梁はりの上うへに止とりてうかひや
忽たちち一個いっぴの小妖せうじやうとて入り某なんぢ只ただ今いま山やまと巡見めぐみり知しれ耳みみ大おほきくは
長ながき和尚わうしやう林りんの中ちゆうに在あり釘鈕くわんぎよを撮とりて我われを殺ころさんん
我われやうくに近ちかれ入りいがかきの人の毛臉ひげつらの和尚わうしやうハんえやさ夜よとて
黄風わうふう王わう守まもりて孫行者そんぎやうじやハ昨日きのうの風かぜの中ちゆうに死しなると者ものなり人
び上ありつたる強敵きやうてきあり攻せむるも我われもとを度たへ金かねにとて一ひと只ただ我
風かぜと續つづくものハ靈まを菩薩ぼさつのとて入りとて行者ぎやうじやこれとて
大おほきよよろこび仰まをさの中ちゆうに死しな本相ほんさうと顯あらわハ戒かいとて
王わうが云いふ言ことばを物ものがら靈ま士し菩薩ぼさつの住處すむところのわくかたらん
二人ふたり商議しやうぎしてつりたるふも忽たちち老翁らうおう一人ひとり止とり行い来きれ

安否 窺師 變蚊 悟空

悟空

三藏



新本法苑珠林

戒の曰く師兄は老人に回みらんは行者點頭く老人の
前より来るなり靈吉菩薩の住する所やあつたりと居るに
老人答ては正南に小須彌山と云ふ山あり是靈吉菩薩の
住所なりかく云我の白金星を長庚なりと云終て
風と化して飛来りて行者是とやて直に角斗雲に
かり暫時に小須彌山に至る靈吉菩薩の妻の子細あり
師又と救ひてと下は菩薩そのなり領承りて定風世
懐く飛龍寶杖と推乃行者と打はれ雲にありて黄風
洞に至りて行者洞の前にとりて待待とて門の
扇と微塵にありて黄風来れと叫びられ黄風王と云ふ怒
例の洞又と云けおどり出て行者と戦ふ事數十合黄風王

やうと云口を開きて風を吹んとなりんは時靈吉菩薩雲中
より飛龍寶杖を投下しむる忽ち八爪の金龍と云ふ黄
風王が頭と擲んで空中へ引上るは遂に黄風が本洞より黄毛
貂鼠と云ふに多菩薩行者に宣く他の靈山に住して得道
なるは琉璃盃の清油と偷て金剛が爲に把られんと云思れけ不
にまゝ妖精と云ふなり我を渠と如来の許へはれ行布下知れりて
斗らふなき有ありとて遂に鼠と云ふ西の方よりや行者
西に向くは相へ八戒と俱に洞の中にかは入り小妖と云ふを
師父と云ふを暫く洞内に居ると体ら再び雲をよとて西
と云ふに丁後

會入百廿七の節

靈吉杖龍擱黃風頭



靈吉

悟空



黃風

八戒大戦流沙河

本又奉法收悟淨

寒蟬敗柳に鳴き大火西に向く流る秋のはらめれたるれば
こころぼそくも三蔵ハ二人の弟子にのたまわれ嶮難と凌ね道と
もつぎむしの忽前面に一條の大阿あり大波湧りて何の廣
さ其へくばくとの隈をぞ知れ山岸より上りて王もつる傍に一つの
石碑あり上は流沙河の三字と篆字と彫付腹上は四行の小
八百流沙界
三千弱水深
鷺毛飄不起
蘆花定底沈

三蔵是を見くさしていせ及る流沙河あり何さぬは何を後らんと

容易とてたあはれと河岸にまき眺むるに忽ち河浪山のごとく
巻上り一個の妖精はらわれさう八戒鉈を掲げ走り考と見と
えればかの妖精項に九個骷髏と繫ぎ掛け根の寶杖と振て
八戒と目づけ討てかゝる八戒も打鉈と持てさう戦ひとぞ二十余
合に及ぶふに行者鍊棒と揚ぐ我を助るんと及び妖精行者
がまゝとんと叶すぐやおのひら人ゆくあ中に流して行方と見え
よひぬ八戒大きに怒り罵るるに我むじ天上に在る天河水兵
を督どう願ふるあり性をぞ知る何處へ流るも今手もたつては
案内さるんとぞも流る直微を挽ぎ釘鉈と掘水底に墮り
つゝがかの妖精杖擧ぐささるうとぞめあ中に在る我りてすま時
はう八戒心中に一計を生じ偽り負て水上にまき走れん妖精



追とやうと向くと追くみ面にあつて出浪と踏まて二時平も
 我いづが行者やと八戒と助人とと雲に打をり鉄棒を振と
 とととつれ妖精是とんも再とびお底く引とる八戒行者よ
 向ひ罵うらうの你意猴子我妖精と牽て山岸に上らんとおの
 所に再とびお底く放ちまうたう行者笑ふて你嗜く云
 とおわれとと西人ひとく三藏の所前に来る戦のさぬ物落
 がさめて行者やとる今日日已と晩にあつり夜あけまは再び計
 とをめぐじは妖精ととるへたし師父ととる安ん今宵は
 川端に一夜とあしたまふととる身と起し雲にまう人家と尋
 て一鉢の齊飯と推し師父にとるめまうととる八戒同く曰く
 哥何國に性て齊飯ととるまあるや行者曰く北の方七千

里の内に人家りとは我は齊飯ととりめ家の裏とまると
 凡そ万里八戒笑ふ曰く你偽とや事たうれかる遠き道と
 いとる須臾の内に往まへんや行者の曰く你いやととる我舩
 斗雲の一時飛行と十万里八千里のや五七千里一万里の道と
 行いとび頭ととるよろもおやと八戒が曰く哥々たとる飛行
 の自在まらぬ中の妖精とお控る師父を背て一とびにばらと
 海より行者の曰く你も原ま雲に騰る事と知まう何ぞとや
 師父を背く先は何とばらと師父の九胎肉骨の人あると云
 中にいさまひ俱に飛行とる事とつらば彼大山と極く大地に踊
 法に至る我よく是を行くと若海超脱せざる人を推すと一
 も動本はつらば師父の身命と守護し我後が業果の場所

三藏



戒

流沙河頭 戒



沙悟淨

と待たるるなりとかう合て其夜の川岸に一板をありしに
行者師父に向ひて曰くは何の妖精我が計畧に陥らば我今
より南海に往て観音菩薩とたのまや師父の八戒と執
はるにまことせ給へと雲に花のり南とて出行するはとまき音
陀落山は東行林にあり菩薩とて流沙河に妖精ありて師父
海にたるといぬがらうの菩薩計をとおへまことと我の始終と
物傳りされば菩薩の曰く流沙河の妖精ハ吾先に善とて先
唐僧と守護して西天に往て試給へ置ぬ你後生をとりまを
云ば渠まらう歸順とまきん要なき事と考とるまのつると
多しむ本又とられ你流沙河に至る悟浄と叫ぶ唐僧と
守りて何と後とどくそ一個の紅葫蘆ととり給へ本又い

たまへ行者津附と本又と傳ふ雲のり流沙河に至りしに
本又則ちの葫蘆ととらげて流沙河の水面に至りし悟浄ハ
いづくにあるや経ととる人々にあり早く本又とて謁を乞へと叫ぶ
忽ち浪とひるぐくかの妖精あらわれ出本又をきて礼をば
菩薩はいづくふあひや本又とて問ふ本又曰く菩薩ハまらうは
我に命じて你を唐僧の弟子とせば何と後しやせとの作
妖精是とて曰く其唐僧はいづくにありや本又曰く東の岸上
庵せる僧則是とらう妖精大きにあはれき黄錦の直懸とらう
岸の上り三藏の前れれと行ひ弟子師父の尊容を知らば
の不礼をばらう致す其罪とゆゆしく三藏の曰く你真實に
我教を守らんとしてらう妖精の曰く弟子向に菩薩の教化

三蔵 乘 葫 蘆 渡 流 沙



三蔵 乘 葫 蘆 渡 流 沙

三蔵 乘 葫 蘆 渡 流 沙

又法名を以悟浄と賜ふ師父のまを待たせしむるを待たせしむる
何を偽つるの理あらんや三藏居士を以てたきを以てよるを以て別
名付く此和尚と以てむ其時本又妙悟浄と名づく首より
かけたる九つの骷髏を以て索すく懸き菩薩より賜ひ紅の菊
蘆と其正中に居水に浮りて三藏と請てこれと示せやめを
八戒悟浄左右に在り孫行者龍馬と奉て後にまこりひ本又
云云にのりてこれを守護し飄然として流沙の大河と西の岸より
着給ふ本又のそぎ蘆とよりぬきぬき九個骷髏を以て風
と化して消えたり三藏本又に向く再三拜礼し三人のそまふこと
俱にやと西の方へいそぎたり

三藏不忘本

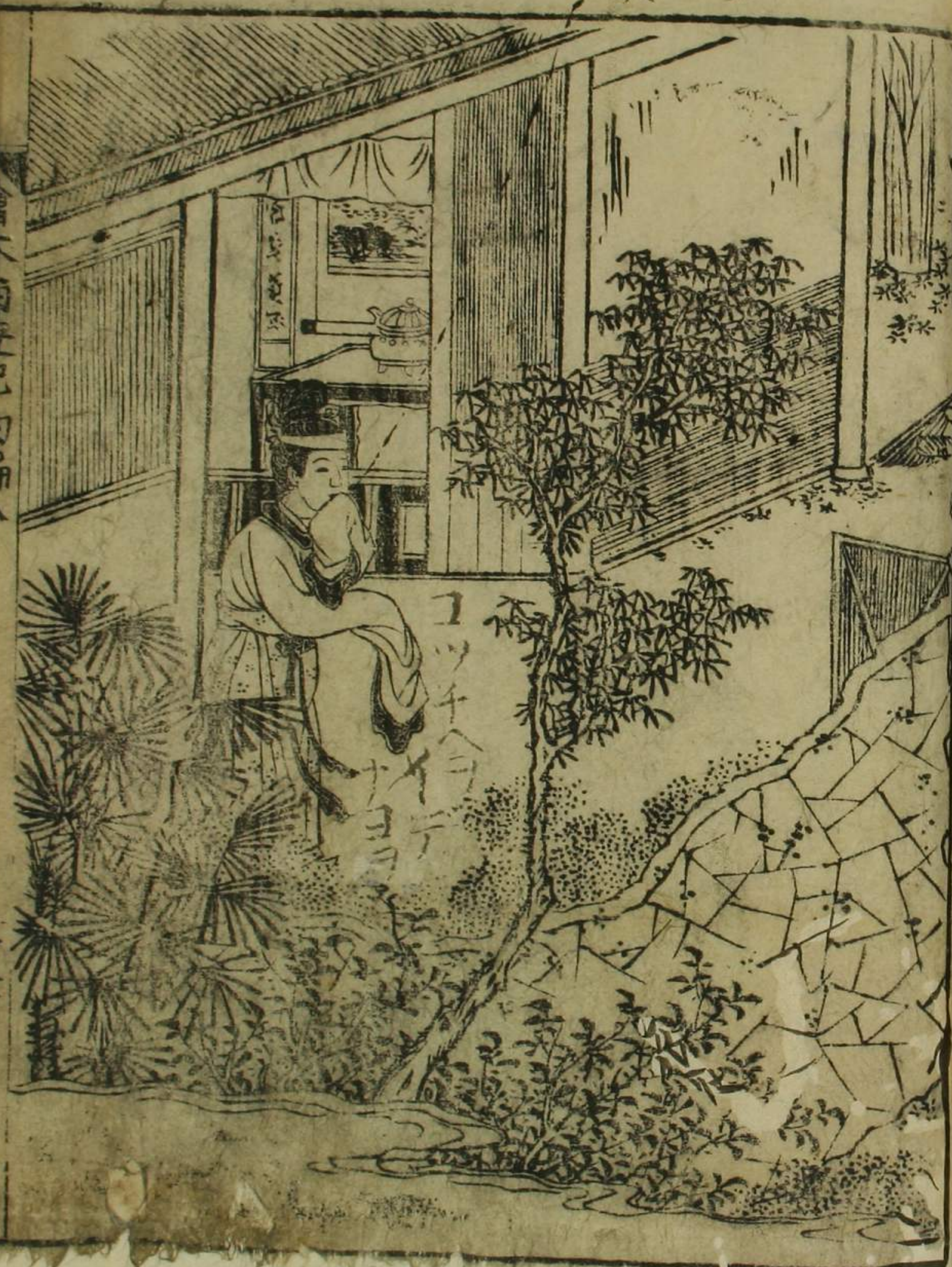
四聖試禪心

師徒四人流沙河とるそぎ路とるりていそぎほとん早秋の季
に至りて日をもやく西にぼく宿るべき家やあると向への方と
望まむとむば松林の下に一簇の人家あり其中に家傳り大
れうてこち後にくじはたる屋あり行者門内に入ぐるか
ぐひかたる南面に三間の大廳あり壁に一幅の壽山福海の
画をうけ前に香几と罍を以て空林大のまより得といれど位は
たけり肉よりちよき婦人まゐりて何人まゐるに寡婦の家を
由見えやと名めたり行者答て曰く我く師徒四人東土より
天子の勅をかへり西方に往く経をたらんとて日既よるれて

三藏不忘本

四聖試禪心

此
出
十
サ
イ
ニ



師
弟
至
度
婦
遭



いほり一板の宿りとりごとくありと中流に婦人あつてたたり
今やいづらんこころをいせあやうくむくむくしる
請下礼とほて相見ゆは婦人脂粉のまをみりておのづから
風流あり女のまをみりて香茶と軟く齋飯を供く三藏やうく
恩を謝し且土地の名と婦人の姓氏と同むる婦人言て曰くは
所ハ東印度の中地毒が姓ハ賈氏とい近年不幸にして夫と失
三人の女あり一は只男子一人ははここの家奉の納むらるるを
以て接脚まゝ招き入るんとおもひおろし長老師弟四人我家に
宿りあふも奇縁とてやらん我々母子の女もやこぞ四へいふと曾
人のゆゑに長老遠く西天に至り要なきこといへりやいづらん
より我家にありて措老日虎の園とよむと書よまよふやとんぬ

かゝれぬひひとていふかくさふたんのいづりたるのからん我女あ
大女ハ眞眞と号其次の愛愛といひ未女憐憐とて艶色をこ
風流あり其上我家水田三百頃旱田三百頃果木三百根牛馬
羣とはは猪羊敷とまゝは庄堡草場ともれ七十余ヶ所家内八九
年の米穀あり其外後羅金銀倉庫に充たり長老志と決して
還俗し我家の主人とありまじと勸るにぞ三藏はとやいひて恰
孩子の雷に驚き雨にちかや蜘蛛のてく果れ果てあやうなるやハ戒
いふ事とて心神怡惚とてあやうなる三藏の袖を打て
より婦人のさぬくと説話しあはれ何とて一言の答へはは玉のさるや
げ時三藏舌を荒らしてはて吐て曰く你も是出家人よあやうや富
貴といふんと動うもあやうとて意を留るに我徒身にあはれ



情癡鳩起入菊

...

宣つゝ婦人ゆく笑つて曰く出家は何の好處まがらも三蔵の
曰く故人詩あり証とぞ一

出家之志本非常 推倒従前恩愛堂 外物不生閑口舌

身中自有好陰陽 功完行滿朝金闕 見性明心返故郷

猪似在家貪血食 老来墜落臭屎囊

婦人曰とや大きに好む這和尚かる不れと云て我をあらむま
何之其も再々び你徒と親結と世とと裏面に入へ腰門と云
まゝり八戒は動靜とんくくろに三蔵と云ふ師父とけり
弟皆是情なきにあはれ世の誘ふ和尚の足る中の餓鬼あり

とらう誰り今般の欠度とまらる者たらん你徒好まると都
てお破り燈火もなく茶もあふるものささいいへんしといふ
どやたと你等飢喝とるるも自らりりともたふ本をわかれいへ
廿八日馬を便さきこさかれ餓にほくれま明日人をまをさること
らうはは我馬を引く草を嚙入匠とほやきけく韁繩を引て
行者とく妙悟浄にやういはい教子何まへ行や我流に
ほい親ひ見るとこそをさして蜻蛉と化し八戒がたのあ
らうぬをさるるに八戒馬に草嚙んもせはけぬの後門へ
腹がた向の婦人三人の女見と共に茶のまらる花を看てた
むをあらり三女八戒とぞいへりけり門内へかかれりうみ婦
戒にむひ長老いへん行りや你も師父の執意に引こられ



食をとりて西天に行んとするに八戒をうけて曰く唐僧はこれ
天子の勅をうけて徑をともとしり人あるれば其君命に違ふ事と
罪れ敢て婦人の勧めをきかざらん我はもと異と異なり娘は吾言
長く耳をきかると嫌ひ玉のどん謹ぐ命にきかざらん婦人の曰く
你吾言を順ぐんとするに再び師父兄弟にも商量し玉の八戒
多し師父原ま我父にあらず何ぞ其言の上にあざらん都て
我公のやうに行らんのと定めたれ婦人三人の女と商量せんとも
後門をさびて内に入らば八戒もやうと馬を引くを行者この
動静をよしく目とをけえにゆりて師父と沙悟淨におさる一茶を
催す所へ忽ち腰門を押しき紅燈の光りさるとかや死うの
婦人三人のむをりと推乃て生れ三藏師父とおせむ其三人

の女標致尋常にありは縁眉翠と画き粉面春とは真
傾國の色あり八戒をうけは美女と刀を冷し酔ふとく
けは行者一々に八戒をうけ一々に婦人を引き我你後
後門をさびておさるせと聞置る婦人をやう女婿と帯て
進むとて推て裏面に突入るれば八戒の足も起るによろら
は遂に門を扉して入らるる

逆十八

西天八百里

小前田先生編
井金小二郎一代記 三十
大岡小西屋政談 十二
繪本 星月夜顯晦録 三十
大尾

新説伊藤専三編
曉天星五郎一代記 五十
近世小説 河内山實録 五十
大郷穆編
燕山外史 二冊

怪談 牡丹燈籠 三十
一御花主様方より流りけん能忘極に書かれし
年來かゝる後仕仕の事加けるに日には
かゝる仕合に書かれし御世に相成西洋各國の書物
翻譯書繪入本滑橇等の都て感事類品に御世所持
仕格別おん下其相働るに御世同御世の事相
御世下下き其後猶也然るに其方様は御世の事

藍原多助一代記 四十
大尾

業同
平業同 文治一代記 全
誠光堂謹白

和漢書物小説貸本所

東京橋區弥左工門町十三番地
文永堂 大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地
誠光堂 池田屋 清吉

